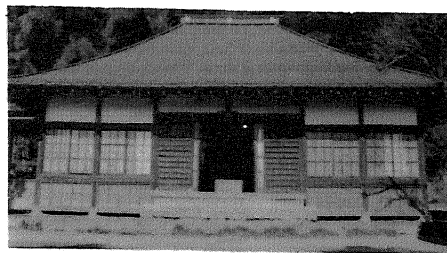


宝地区

30. 用津院（六地藏）
31. 桂林寺（叶が池・彼岸桜）
32. 小山田館跡
33. 広教寺（地藏菩薩坐像・大般若経）
34. 船形春日神社（衣更えの神事）
35. 上大幡の安田家（ナシの木・八房の梅）
36. 福源寺
37. 機神社
38. 宝鉾山跡
39. 浅間神社

30. 用津院



用津院本堂

本院はもと中津森の中島にあったが、二世積桂宗篤和尚のとき洪水のため崩壊し、元禄年間現在地の金井に再興したといわれている。

現在の本堂は明治五年火災に遭い、後再建したものである。

曹洞宗向富山用津院といい、本尊は虚空蔵菩薩で、合祀仏に聖観音が祀られている。平栗原観音寺が廃寺となり合祀したもので、郡内三三番観音霊場第一六番札所である。御詠歌に「あな尊とたのむ誓いは観音にみちびき給えはこぶあゆみに」と詠われている。

開山は鷹岳宗俊禅師で、開基は郡内領主小山田耕雲と『甲斐国志』にあり、耕雲は、小山田信長と考えられる。

六地藏

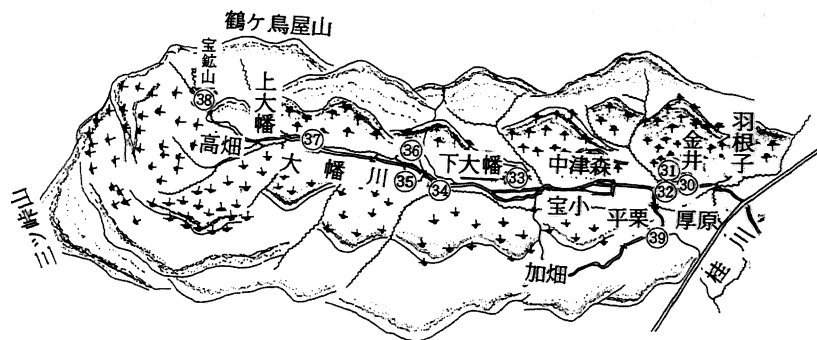
伝承によれば今を去る三〇〇年程前、郡内地方はうち続く飢饉におそわれ、その上、税のとり立てが厳しく百姓は極度に難渋し、餓死者が多数でる状況であった。寛文七年（一六六七）選ばれた百姓総代大明見村庄屋惣右衛門、朝日村庄屋惣左衛門は秋元氏に直訴したが、二人は死罪となり、家族は追放、家は断絶となった。

更に、延宝八年（一六八〇）は諸国凶作におそわれ郡内もその例外ではなかった。こんどは、郡内領百姓代表七名が越訴という手段で、江戸町奉行所に訴えたが、七名の代表は町奉行から秋元氏に引き渡され、延宝九年二月二五日、金井川原において処刑された。

七人の首を洗ったという「首洗いの樋」が今も用津院に残されている。

六地藏像

六地藏信仰によせて七人の冥福を祈ったものとも伝えられている。

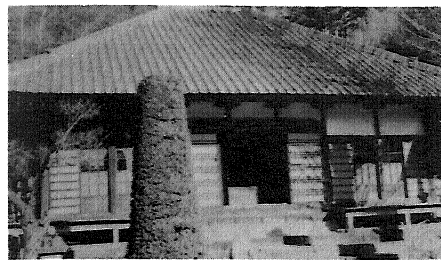


31. 桂林寺

臨濟宗富春山桂林寺といひ金井に所在し、本尊は東方薬師琉璃光如来坐体の木像で、胎内に釈迦像が祀られ、仏工運慶の作と伝えられている。

明徳年間（一三九〇〜九三）鎌倉建長寺の格智禪師がこの地に教化のとき、領主小山田富春が師の高徳に帰依して開基となり、その名をもって山号とした。

中興開基は、小山田信茂で、小山田氏歴代の墓所が



桂林寺本堂

現存している。

寺は度々の火災により、寺宝や古文書を焼失し、現在の本堂は、明治二五年川棚正観寺の建物を移築したといわれている。

白隠禪師とのかかわりが深く、萬霊塔は白隠の書であり、寺宝として、「白隠禪師語録」が残されている。

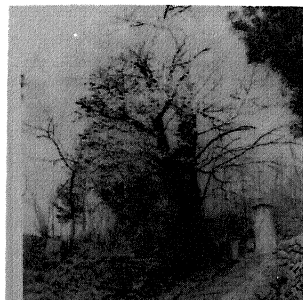
叶が池

桂林寺に向って左裏の「叶が池」に弁財天を祀る。

早魃の時、雨乞をすると、靈験極めてあらたかで、必ず奇蹟があり、願がかなうとして「叶が池」と呼ばれ、金井の地名起源ともなったといわれる。右側に若宮八幡宮を祀って寺の守護神としたが、若宮八幡宮は現在金井の氏神様となっている。

彼岸桜

桂林寺正面石段の上であり、開山禪師手植の桜といわれている。樹高一二メートル、根廻り五メートル、目通し幹囲三・七メートル、樹齢は、数百年を経ており、村人はこれを豊



彼岸桜

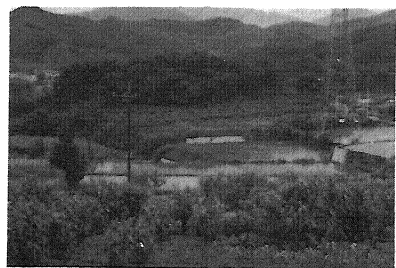
この桜は、昭和四九年四月一日市の天然記念物に指定された。

32. 小山田館跡

都留郡小山田氏の祖先は、源頼朝の有力な御家人であった武州小山田荘（東京都町田市）の荘官小山田有重の子、小山田五郎行平（行重）であると「甲斐国志」に記されている。

頼朝の死後、小山田氏の一族は北条氏の謀略を逃れて、行重及び一族が分散し、都留郡多良郷に居住したと伝えられている。

都留郡小山田氏が文献上で明らかにするのは、桂林



小山田館跡

寺の寺記によるもので、桂林寺の開基の富春は小山田弥二郎ではないかといわれており、弥二郎の女が武田信満に嫁ぎ、武田信重を産んだと「鎌倉大草紙」にある。

都留郡小山田氏の系譜は、富春（弥二郎）―信友―信美―信実―信光―信長―弥太郎―越

中守信有―出羽守信有―出羽守信茂、と続くが、天正一〇年（一五八二）三月信茂は武田方に味方した理由で、織田信長のため、甲府善光寺で一族と共に滅亡した小山田氏について、「妙法寺記」につきのように記されている。

年号	世暦	事	項
永正一八年	一五二二	二月一九日、武田信虎小山田館を訪う。	
大永七年	一五二七	中津森様（越中守信有）百坪ニ館ヲ構築スル。	
享祿三年	一五三〇	三月、中津森ノ館が焼ケル。	
享祿五年	一五三二	谷村へ居館ヲ建て一族郎党ト引き移ル。	

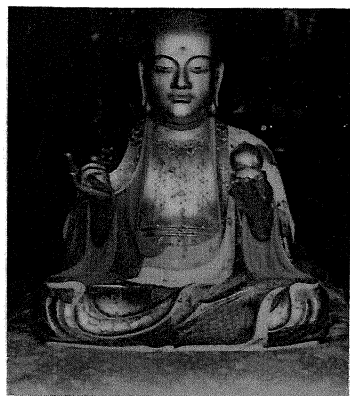
小山田氏の中津森館跡は「用津院ノ東ニ在リ」と、「甲斐国志」にあるが、現在までの調査では、館跡は桂林寺と用津院の間の台地上にあったものと推定されている。

台地に今も堀の一部が認められる。



広教寺山門

地蔵菩薩坐像
座底に「明徳元年（一三九〇）六月十六日重吉在判歳二十三」と記されている。また台座に「明徳元年四月二十三日法眼院營謹作」とあり、広教



地像菩薩坐像

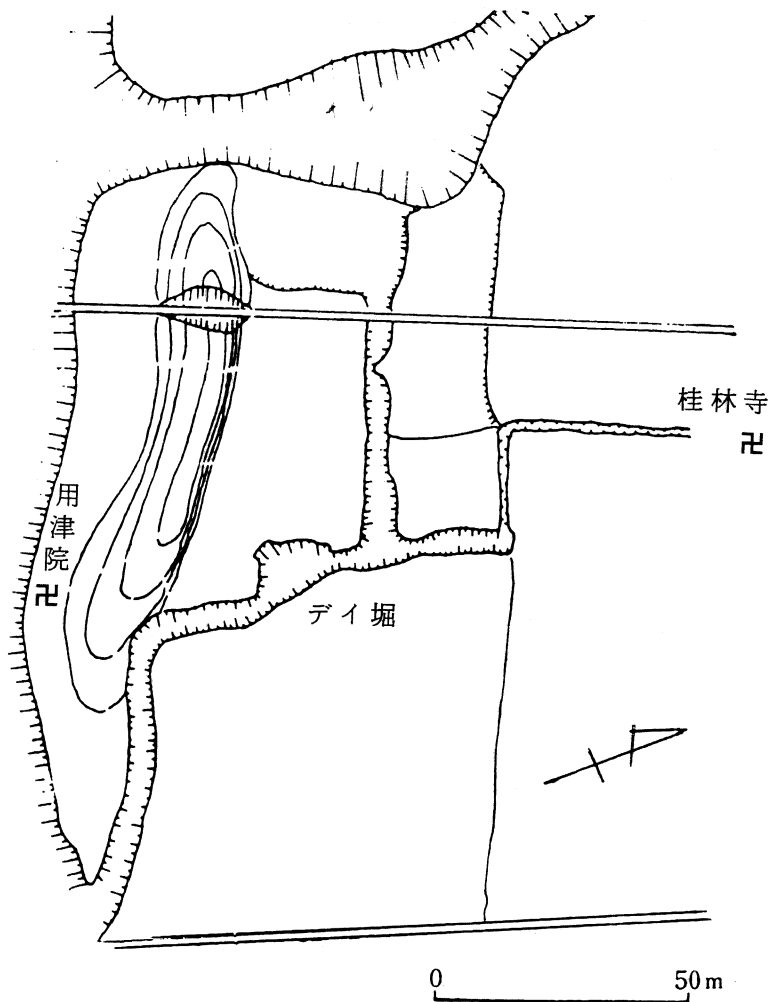
昭和五二年六月二九日、市の有形文化財に指定された。

33. 広教寺

曹洞宗大幡山広教寺といい、本尊は延命地蔵菩薩で、体内に地藏立像の小仏像が祀られていたといわれている。

建仁二年（一一〇二）鎌倉の源頼家の命を奉じて寿三和尚が此の地に來て一寺を建立し開基となった。数代にわたり建長寺末寺であったが天文九年（一五四〇）曹洞宗の石心宗玖和尚が住持のとき改宗、八代郡米倉竜安寺末寺となった。

総門の扁額「大幡山」は、加賀大乘寺の名僧舟宗胡禅師の書かれたものである。



小山田館趾実測図

寺寺記には七条法眼と言う人となっている。院の字を用いる仏師は、一般に院派と称されており、本菩薩坐像は院派の特徴である保守的で整美な趣きが表現されている。年代が明記されているものではない、現在市内で一番古いものである。坐高六三センチメートル。

広教寺の大般若経

大般若経は、大般若波羅密多經といって、仏教の中心思想である一切の諸法皆空の理を明らかにしたもので、唐の玄奘の訳（六六〇〜六六三年の成立）で六〇〇巻から成っている。

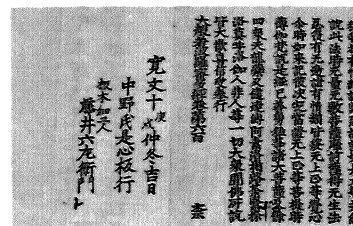
国家安穩、災害消除の祈禱行事として真言、天台、禅宗などで転読され、それがさかに行なわれたのは天平の頃からといわれている。

十六善神がこの経を供養するものを守護すると伝えられ、例年四月十六日の祭礼の日に転読される。

昭和五十七年五月一八日市の文化財に指定された。



大般若経



大般若経

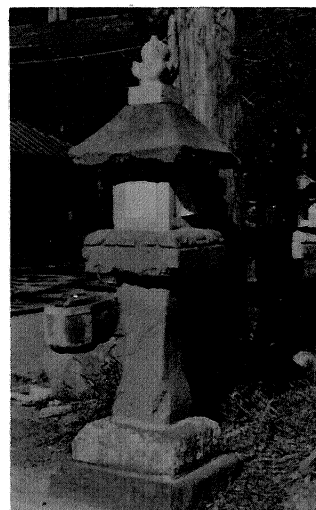
34. 船形春日神社

祭神は、日本武尊・天兒屋根命・諏訪明神で、祭礼は九月一五大幡の氏子により行なわれている。社もと高畑の春日本社から遷座したものである。舞殿には、まわり舞台が装置してあり、かつて大幡歌舞伎が盛んであった当時の面影をとどめている。



船形春日神社 社殿

衣更えの神事
本殿の床下に、日本武尊が東征の際座したという自然石が祀られている。この御神体には、白い布が巻かれていて、六〇年に一度布を取り変える衣更えの神事が行なわれている。



石造物（春日神社境内）



石造物（春日神社境内）



広教寺本堂